

私は中学2年生を担当し、「電圧」についての授業を行いました。この3週間、生徒と関わる中で、「教師になりたい」という思いは一層強くなりました。実際に教師の立場で学校を見てみると、想像以上に業務量が多く、体力的にもしんどさを感じる場面がありました。しかし、生徒との会話や笑顔は私の原動力となり、全力で実習に取り組むことができました。その結果、非常に多くの学びを得ることができたと感じています。

授業では、「なぜそうなるのか」という理由を大切にしながら、楽しさを感じられる学びを意識して取り組みました。例えば、電圧計の使い方では、「並列につなぐ」と覚えるだけでなく、「なぜ並列につなぐのか」を生徒と一緒に考える授業を行いました。これは、私自身が理科に対して「なぜ？」と考えることから「なるほど!」と納得できることに面白さを感じているからです。担当した学年には理科が苦手な生徒が多くいました。そのため、「理科っておもしろい」「分かるって楽しい」と感じてもらいたいという思いで授業を行いました。生徒から「なるほど」と声が上がったり、不安そうな表情がパッと明るくなったりした瞬間に、私は教師としてのやりがいを強く感じました。

この教育実習を通して、特に二つのことを学びました。

一つ目は、授業を計画し実行することの難しさ、そして、授業力こそが教員に最も求められる力であるということです。私は、生徒同士が話し合えるよう机をくっつけたグループ形式を取り入れたり、実験を多く取り入れたりしました。さらに、生徒が発言しやすくなるような声掛けや問いかけを意識して行いました。そうすることで、生徒が主体的かつ協働的に学びを深めることができると考えたからです。実際に授業を行う中で、生徒の反応や状況に応じて質問の仕方を工夫したり、私自身が楽しみながら授業を進めたりしたことで、生徒も自然と意見を出しやすい雰囲気を作ることができました。その結果、授業に対する反応が増え、わからないことがあれば手を挙げて質問をする生徒も徐々に増えていきました。このような体験から、授業を通じて生徒との信頼関係を築くことができると実感しました。信頼関係があれば、生徒が悩みを相談しやすくなったり、生徒の小さな変化にも気づきやすくなったりしたと考えています。だからこそ、教員にとって授業力は非常に重要だと強く感じました。

二つ目は、「童心をもって生徒と関わることの大切さ」です。生徒と関わる際には、大人の価値観で一方的に導こうとするのではなく、教員が生徒の目線に立つことが大切であると、道徳教育の授業説明会で担当教員から教えていただきました。実際に私も、生徒の行動や言動に対して「なぜそのような行動をとったのか?」ということ、生徒の立場に立って考えたり、自分自身の中学生時代を思い出したりしながら関わるよう心がけました。そうすることで、一見すると理解しがたい行動にも、背景や理由があることに気づくことができ、

一つひとつの言動を多角的に捉えることができました。また、授業においても同様に、童心をもとに「生徒が心から楽しめる授業かどうか」を常に考えて準備しました。例えば、電圧の授業では、ただ知識を教えるだけでなく、電圧を生活に結びつけて理解したり、生徒が「なんで?」「どうしてそうなるの?」と疑問をもったり、発見を楽しむことができるような工夫を意識しました。こうした姿勢で関わる中で、少しずつ生徒との距離が縮まり、表情や反応にも変化が見られるようになりました。生徒の世界を理解しようとすることは、信頼関係の第一歩であり、学級経営や個別対応においても非常に重要であると実感しました。

この実習を通して私は、「授業力」と「童心をもって関わる姿勢」の両方が、教員としての根幹を支えるものであると学びました。今後は、この経験を活かしながら、より多くの子どもたちの「わかる喜び」や「学ぶ楽しさ」を引き出せる教員を目指していきたいと強く感じています。